

高校生が抱く不登校へのイメージ

— 不登校生徒への関与行動経験に着目して —

近藤 栞名・清瀧 裕子

要旨

本研究は、高校1年生を対象に不登校に対するイメージや評価意識が性別によってどのように異なるのかを検証することを目的とした。また、不登校状態にある生徒及び不登校状態に陥ったことがある生徒（以下、不登校生徒）への関与行動経験にも着目して検討することとした。159名の高校生を対象に質問紙調査を行った。その結果、不登校に対する『批判的イメージ』は女性よりも男性の方が高いことが示され、特に『自発的な関与群』において男女差が見られた。また、男女に分けて、関与行動経験に着目し分析を行ったところ、女性においては『自発的な関与群』の方が『関与なし群』および『他者による関与群』よりも不登校生徒に対して『関心』が高いことが示された一方、男性においては全ての下位尺度において有意な差はみられなかった。これらの結果から、性別によって不登校生徒に対する『批判的イメージ』の高さや、女性においては関わり方によって『関心』の向け方に違いがあることが示された。

キー・ワード：高校生、不登校、イメージ、評価意識、関与行動経験

問題と目的

近年、日本における不登校児童生徒の数は増加している。2020年度の調査の結果、不登校者数は増加の一途をたどっており、小学生は100人に1人、中学生は25人に1人の割合で不登校児童生徒が存在していることも示された（文部科学省初等中等教育局児童生徒課，2021）。つまり、現在の小中学校では、不登校児童生徒の存在は当たり前ともいえる状況である。

このような不登校児童生徒の増加が社会問題となる中、文部科学省初等中等教育局児童生徒課（2019）は、不登校児童生徒への支援として、本人の希望を尊重したうえで様々な関係機関等を活用し社会的自立への支援を行うこととしている。また、不登校となった理由に応じ、児童生徒が主体的に社会的自立や学校復帰に向かうよう見守り、環境作りのために適切な支援や働きかけを行う必要があるとしている。したがって、近年不登校児童生徒の援助を目的とした様々な機関が発展し、

原籍校への復帰以外の選択肢も充実しているといえる。一方で、原籍校への学校復帰を目指す者も存在し、文部科学省初等中等教育局児童生徒課（2021）によると、不登校となった小中学生の約35%の児童生徒が学校内外の機関による相談や指導を通し、原籍校への登校に至っている。中村・小玉・田上（2011）は、適応指導教室の通級生が援助の中で、「学校への挑戦」を決意し、実際に登校することで学校環境を経験し、それを繰り返すことで、「登校行動」へと移行すると述べている。このことから、不登校を経験した者が再登校を望み決意し、その目標を果たすためには、原籍校での援助環境における連携が大切である。

この援助環境として、友人や周囲の同級生などの学級環境の重要性が考えられる。尾見（1999）は、ソーシャル・サポートの提供者が、男子では中学1年生の時点で、女子では小学5年生以降で、家族から友人に移行するため、小中学生における友人関係は重要であること、そして藤田・西川（1999）は、学校適応感において友人や周囲の同

級生の影響が大きいこと示している。さらに笠井(2001)は、不登校児童生徒が抱く友達への期待において、自身から積極的に友人を求めるエネルギーはないが、友人が家に来たり電話をしてくれたりすることを期待している者の存在が示唆された。つまり、不登校児童生徒自身の活動ではなく、その子と関わりのある友人の積極的な行動が、不登校生徒の支援の一つとして必要となる場合があるだろう。したがって、不登校になった理由に個人差はあるものの、善悪を含め不登校児童生徒にとって友人や学級の影響は大きいといえる。

以上のように、不登校支援の観点から不登校の当事者に関する研究が多くなされている。一方で、不登校に関する研究として、普段は登校しているものの不登校生徒との関わりはある生徒が、不登校をどのように捉えているかに焦点を当てた研究は少ない。松坂(2010)は、不登校について認識が低かったりネガティブなイメージを強く持っていたりする人々が発する言葉や態度が、不登校児童生徒の状態悪化を招くことも予想している。したがって、不登校に陥った児童生徒が学校復帰をするにあたり、教師や職員による学級への働きかけや生徒同士のアプローチの仕方など、環境を調整する必要があるといえる。そのような、不登校に陥った児童生徒への適切な理解や支援へつなげるためには、まずは普段学校に登校している生徒が抱く不登校へのイメージや評価意識を把握することが重要ではないだろうか。

そこで、本研究では、不登校に陥った当事者ではなく通常登校している生徒に焦点を当て、不登校に対するイメージおよび評価意識を検討することとする。不登校研究として、友人や支援者など当事者ではない者に焦点を当てた研究において、本間(2000)は、中学生を対象に不登校生徒への評価意識を検証した結果、1992年から6年間で「批判的意識」を持つ者は減少し、「無関心」である者が増加したことから、日常化している不登校に対して、関心が低下していることを示唆した。また、自身の欠席願望が高い者は、低い者よりも不登校に対して「無関心」であり「羨望」をもつ一方、低い者は「配慮・共感」や「批判」をもつことが示された。以上より、自分自身の登校に対

する思いにより、不登校というものへの評価も異なること、そして欠席願望が低い者の方が不登校生徒に積極的な関心をもっているということが明らかとなった。また、伊藤・岡田(2000)は中学生を対象に、不登校に対する評価と対応について架空事例を用いた質問紙調査の結果、不登校生徒と仲の良い場合の方が不仲の場合よりも、相手に対して「心配・関心」を高め、「批判」「羨望・無関心」などを低めることが示された。これらのことから、中学生では不登校生徒のことを好きか嫌いといった情緒的な要因や親密な関係であるかどうか、不登校に対する評価に影響を与えていることが示唆された。そして笠井(2000)では、不登校児童・生徒を対象としたキャンプのスタッフである大学生を対象に不登校に対するイメージ調査をした。その結果、キャンプ実施前と後で不登校児童生徒に対しネガティブな評価からポジティブな評価へと変化した項目も見られた。さらに、小池(2007)は、大学生は不登校に対しポジティブとネガティブの両面価値的なイメージが持たれていることを明らかにし、不登校の原因帰属において学校教育の苛烈さや対人関係の難しさによって起こると方向転換されてきていることから、「同情的イメージ」が喚起されていることを示唆している。

ところで、友人関係において、榎本(1999)は青年期の友人関係では、男子は活動を共有することを通して、女子は親密な関係を築くことを通して、友人同士の相違点を理解し、尊重した関係へと変化すると述べている。すなわち、性別によって友人との交流の仕方に違いがあるといえる。また、有倉・乾(2006)は、児童・生徒において男子よりも女子の方が所属集団の排他性規範が大きいことを示している。これらのことから、性別によって、友人との関係の取り方や考え方等が異なると考えられる。したがって、不登校のイメージや評価意識においても、男女の間で何らかの違いが見られるのではないだろうか。

以上のことから、自分自身の登校への思いや情緒的な要因、そしてキャンプという共同体験などによって、不登校に対するイメージや評価意識が異なることが明らかとなっている。しかし、性別

における不登校のイメージや評価意識の差は明らかとなっていない。また、不登校者数が増加している現代の不登校に対する周囲のイメージや評価意識の差及び高校生を対象とした検討は少なく、実際の学校現場での関わりを通して抱くイメージや評価意識の違いは明らかとなっていない。

そこで、本研究では、一般の高校1年生を対象に不登校に対するイメージや評価意識が性別によってどのように異なるのかを検証することを目的とする。また、不登校状態にある生徒及び不登校状態に陥ったことがある生徒（以下、不登校生徒）への関与行動経験にも着目して検討する。高校1年生を対象とすることで、不登校に陥ることが最も多いとされている中学時代での不登校生徒への関与経験を想起しやすいこと、そして異なる出身校から進学していることから今までに把握している不登校生徒の偏りが小さいと考えられる。

仮説は以下の通りである。男女において友人との交流の仕方が異なること（榎本，1999）また、女子は男子よりも集団の排他的な関係をクラス内で作っている（有倉・乾，2006）ことが影響するのであれば、男子より女子の方が不登校生徒を排他的に捉えたと推測される。したがって、女性の方が男性よりも不登校に対して「批判的イメージ」「無関心」「批判」などのネガティブなイメージや評価を抱くだろう（仮説1）。対して、男性の方が女性よりも不登校に対し、「受容的イメージ」「同情的イメージ」「配慮・共感」「羨望」など比較的ポジティブなイメージや評価を抱くだろう（仮説2）。また、不登校生徒との関わりによってイメージや評価が変容するのであれば、関与行動経験の種類によって何らかの違いが見られるだろう。

方 法

調査参加者

調査参加者は、A県内のB高等学校1校の高校1年生の内、調査へ同意をした189名であった。この内、不良回答や自分自身に不登校の経験があると回答されたデータを除外し、残った159名（男性82名、女性74名、答えたくない3名、平均

年齢15.3歳、 $SD=0.47$ ）を分析対象とした。

調査実施時期及び調査場所

調査実施時期は2021年7月であった。本調査は、教室にて学級活動内で担任教諭による教示のもと行われた。

調査内容

イメージの尺度 小池（2007）の「不登校イメージ尺度」を用いた。これは3因子（「受容的イメージ」「批判的イメージ」「同情的イメージ」）の計25項目から構成されており、「あてはまらない」の1点から「あてはまる」の5点までの5段階評定で回答を求めた。

評価意識の尺度 本間（2000）の不登校生徒への評価意識に関する尺度を用いた。これは4因子（「配慮・共感」「批判」「無関心」「羨望」）の計14項目から構成されており、「ぜんぜん思わない」の1点から「そう思わない」の2点、「そう思う」の3点、「強く思う」の4点からなる4件法での回答を求めた。

関与行動の項目及び身の回りの状況 不登校生徒との関与行動において考えられる項目、18項目からなる小池・伊藤（2008）の関与行動リストを用いた。これらの項目それぞれに対し、「一度もしたことない」、「個人的・自発的にした」、「親や教師などの周りに言われてした」のどれにあてはまるのか、複数回答可能とし回答を求めた。また、関与行動を想起しやすくするため、覚えている者に対して身近にいた不登校だと思われる親戚や友人等の人数を事前に問うこととした。

手続き

高校1年生の担任教諭及び学校長から質問紙の倫理面等における許可を得た後、調査は学級活動の際に各教室で担任教諭によって行われた。そのため、各クラスでの調査実施者及び調査環境が異なることから、同一の教示文用紙を用意した。回答への所要時間は約5分であった。また回答後には、デブリーフィング用紙を配付した。

結 果

因子数の決定

不登校イメージ 「不登校イメージ」尺度の因子構造を明らかにするため因子分析を行った。本研究では解釈可能性を重視し、先行研究の因子構造と同様の3因子解を採用した(最尤法・プロマックス回転)。特定の因子に対し因子負荷量が.40以上でありその他の因子に対する因子負荷量が.40

未満であることを基準に項目を選択した。その結果、上記の基準を満たしていなかった6項目を除外した(Table 1)。第1因子は、「不安な」や「無気力な」など、ネガティブなイメージであり特に活動的ではないことを示す項目を含むことから、『不活発的イメージ』因子と命名した。第2因子は、「おもいやりのある」や「やわらかい」など、ポジティブに相手を受け入れていることを示す項目が含まれていることから、『受容的イメー

Table 1
「不登校イメージ」尺度の因子分析結果(最尤法・プロマックス回転)

	因子負荷量			共通性
	因子1	因子2	因子3	
不活発的イメージ ($\alpha=.85$)				
9. 不安な	.72	.04	-.05	.49
5. 消極的な	.70	-.06	.07	.56
11. 不安定な	.70	-.01	.11	.52
4. つらい	.66	.02	-.18	.43
20. 複雑な	.64	.16	-.20	.34
8. 無気力な	.63	-.04	.30	.56
16. 内向的な	.63	.17	.18	.35
2. 意欲的な	-.45	.26	-.04	.41
受容的イメージ ($\alpha=.84$)				
7. おもいやりのある	.25	.97	-.03	.72
13. やわらかい	.16	.81	.10	.54
24. 安心な	-.19	.50	.06	.38
1. 明るい	-.30	.49	.00	.50
17. 協調的な	-.29	.48	-.02	.47
12. 積極的な	-.33	.44	.13	.47
批判的イメージ ($\alpha=.75$)				
23. 自己中心的な	.01	-.12	.84	.74
19. わがままな	.02	-.15	.82	.73
21. 楽観的な	-.35	.19	.50	.44
25. 無頓着な	.03	.17	.47	.23
15. 鈍感な	.08	.21	.43	.21
削除項目				
3. 依存的な				
6. 強い				
10. 外向的な				
14. かわいそうな				
18. 自立的な				
22. 弱い				
因子間相関	因子2	-.58		
	因子3	.09	-.09	

ジ』因子と命名した。第3因子は、「楽観的な」や「無頓着な」など、受容的な項目を示しているようにも考えられるが、「自己中心的な」などの否定的な項目と同じ因子構造であることから、のんきであったり何にも気かけなかったりすることを良いこととして捉えていないと解釈できる。したがって、『批判的イメージ』因子と命名した。次に各下位尺度の信頼性を検討するため α 係数を算出したところ、『不活発的イメージ』（ $\alpha = .85$ ）、『受容的イメージ』（ $\alpha = .84$ ）、『批判的イメージ』（ $\alpha = .75$ ）であり、内的整合性は高かった。

不登校生徒への評価意識 「不登校生徒への評価意識」尺度の因子構造を明らかにするため因子分析を行った。本研究では解釈可能性を重視し、先行研究の因子構造と同様の4因子解を採用した（最尤法・プロマックス回転）。分析の結果、全ての項目がいずれか1つの因子に対して.40以上の因子負荷を示し、他の因子に対する因子負荷も

.40未満となった（Table 2）。第1因子は、「助けてあげたい」や「心配」など、不登校の生徒に対して配慮したり共感したりなど関わろうとしている項目を含むことから、『関心』因子と命名した。第2因子は、「はやく来るべき」や「よくない」など、学校に来ないことに対して否定的な評価をしている項目を含むことから、『批判』因子と命名した。第3因子は、「うらやましい」と「自分も休みたい」という項目で構成され、不登校である状態に自分もなりたいたいという願望を示す項目を含むことから、『羨望』因子と命名した。第4因子は、「好きにすればよい」と「本人の自由」という項目で構成され、不登校の生徒に対して興味関心がない項目を含むことから、『無関心』因子と命名した。次に、各下位尺度の信頼性を検討するため α 係数を算出したところ、『関心』（ $\alpha = .78$ ）、『羨望』（ $\alpha = .73$ ）であり、内的整合性は高かった。また『批判』（ $\alpha = .69$ ）、『無関心』

Table 2
「不登校生徒への評価意識」尺度の因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）

	因子負荷量				共通性
	因子1	因子2	因子3	因子4	
関心 ($\alpha = .78$)					
6. 助けてあげたい	.78	.11	-.03	-.08	.66
2. 心配	.75	.22	.02	-.03	.61
8. はやく来てほしい	.67	.35	.07	.00	.57
9. 関係ない	-.65	.26	-.05	.07	.47
12. 腹がたつ	-.42	.36	.20	-.13	.46
批判 ($\alpha = .73$)					
3. はやく来るべき	.14	.68	-.06	.07	.42
4. 理由を知りたい	.11	.62	-.10	.03	.36
7. よくない	-.16	.56	-.01	-.34	.62
13. かわいそう	.25	.54	.01	.12	.30
10. なぜ来れないか不思議	-.36	.54	-.04	.05	.38
羨望 ($\alpha = .69$)					
14. うらやましい	.06	.03	1.00	.50	1.00
5. 自分も休みたい	.00	-.19	.65	-.01	.40
無関心 ($\alpha = .69$)					
1. 好きにさせればよい	-.15	.13	-.01	.83	.65
11. 本人の自由	-.04	-.02	.04	.65	.45
因子間相関					
	因子2	.00			
	因子3	-.19	.23		
	因子4	-.14	-.52	-.01	

($\alpha = .69$) であり、内的整合性は、高いとはいえないものの許容しうる高さであると判断した。

性差の検証

性別を独立変数、イメージ尺度及び評価意識に関する尺度を従属変数とした対応のない t 検定を行った (Table 3)。その結果、男性の方が女性よりも有意に「批判的イメージ」が高かった ($t(154) = 3.213, p < .05$)。その他の下位尺度においては、男女の間で有意な差はみられなかった。

さらに、関与行動リストに基づき、一度でも関与行動を「個人的・自発的にした」者を『自発的な関与群』、自発的な関与行動はしなかったものの「親や教師などの周りから言われてした」者を『他者による関与群』、そして一度も関与行動をしたことがない者を『関与なし群』とし、関与行動経験を3群に分類した。そして関与行動経験の3群それぞれにおいて男女差を検討したところ、『自発的な関与群』において、男性の方が女性よりも『批判的イメージ』が高いことが示された ($t(83) = 3.242, p < .05$) (Figure 1)。したがって、自発的な関与をした者の中では、男性の方が女性よりも『批判的イメージ』を持っていることが示された。一方、他の下位尺度、及び『他者による関与群』と『関与なし群』においては、男女の間で有意な差はみられなかった。

男女別での検証

関与行動経験がイメージに及ぼす影響を男女別

で分析した。男女別に、関与行動経験を独立変数、イメージ尺度及び、評価意識に関する尺度の各因子の平均値を従属変数とした一元配置分散分析を行った。その結果、女性では『関心』のみに、関与行動経験の有意な効果がみられ ($F(2,71) = 9.845, p < .001$)、『自発的な関与群』の方が、『関与なし群』及び『他者による関与群』よりも有意に不登校への関心が高いことが示された (Figure 2)。

一方、男性では全ての下位尺度に有意な効果は見られなかった。

考 察

本研究では、高校1年生を対象に不登校に対するイメージや評価意識が性別によってどのように異なるのかを検証することを目的とした。また、不登校生徒への関与行動経験にも着目して検討した。

性差の検討

本研究の結果から、男性の方が女性よりも『批判的イメージ』が有意に高いこと、そして関与行動経験の『自発的な関与群』において、男性の方が女性よりも有意に『批判的イメージ』が高いことが示された。したがって、女性の方が男性よりも不登校に対して「批判的イメージ」「無関心」「批判」などのネガティブなイメージや評価を抱くだろうという仮説1、及び、男性の方が女性よりも不登校に対し、「受容的イメージ」「同情的イメージ」「配

Table 3
性別ごとの各下位尺度の得点の平均値と標準偏差および t 検定の結果

	男性 ($n=82$)		女性 ($n=74$)		t 値
	平均	(SD)	平均	(SD)	
不活発的イメージ	4.01	(0.69)	4.03	(0.67)	-.148
受容的イメージ	2.18	(0.74)	2.16	(0.72)	.196
批判的イメージ	2.78	(0.73)	2.39	(0.78)	3.213 *
関心	2.82	(0.64)	2.98	(0.51)	-1.808
批判	2.25	(0.60)	2.26	(0.60)	-.061
羨望	1.78	(0.79)	1.68	(0.67)	.844
無関心	2.98	(0.64)	2.91	(0.69)	.662

* $p < .05$

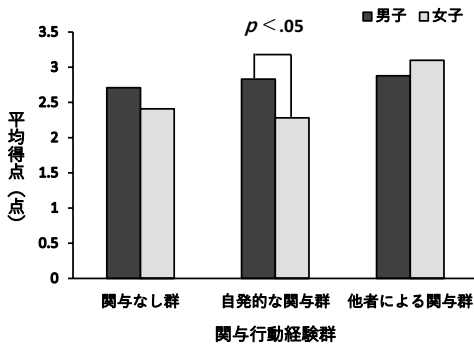


Figure 1. 関与行動別「批判的イメージ」の性差。

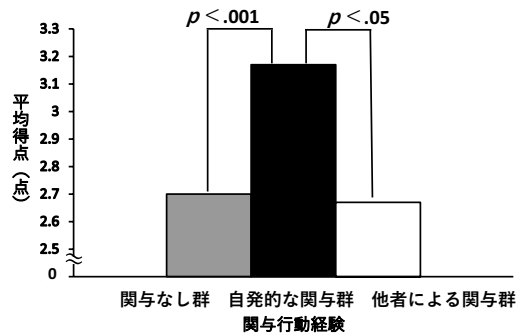


Figure 2. 女性の「関心」における群間差。

慮・共感」「羨望」など比較的ポジティブなイメージや評価を抱くだろうという仮説2は支持されなかった。

男性の方が女性よりも不登校に対して『批判的イメージ』が高まったこととして、登校への規範意識が関係していると考えられる。小栗（2019）では、男子が女子よりも「登校義務感」が高いことを示している。また、原田（2005）では、進学校の生徒は、それ以外の普通科高校及び職業高校の生徒に比べて校則遵守意識が高く、校則の必要性を認める傾向も強いと述べられている。本研究での調査高校は進学校であったことも含め、女性よりも男性の方が登校を選択しなかった不登校生徒に対して批判的なイメージが高まったのではないかと考えられる。

一方、『批判的イメージ』以外の他の下位尺度では性差が見られなかった。これは、女子は男子よりも集団の排他的な関係をクラス内で作っている（有倉・乾，2006）一方で、友人との心理的距離や同調性、グループ境界の強固性などに性差が見られず、近年は男女問わず空気を読む行動が求められる（石本，2011）からではないだろうか。つまり、男女ともに周囲に同調する傾向があり、友人になった後では友人関係のあり方や捉え方に性差が見られないと考えられる。したがって、本研究においての、不登校のイメージや評価意識にも差が見られず、ほとんどの下位尺度に対して、男女の間で有意な差が見られなかったのではないだろうか。これらのことから、本研究において仮説1および仮説2は支持されなかったのだろう。

男女別の検討

さらに、男女別で検証を行った結果、女性では『関心』のみにおいて、『関与なし群』及び『他者による関与群』よりも『自発的な関与群』の方が有意に関心が高いことが示された。一方、男性では全ての下位尺度において関与行動経験の群間で有意な差が見られなかった。

鈴木（2020）によると、女子は相手そのものに関心を向け、男子は共通のもの共有を介して友人と関わるなど、友人との関係性を形成する過程の中には性差がある。したがって、女性は交友関係において相手への関心が重要となり、親密な関係になる中で、相手に関心を向けやすいといえる。本研究での『関心』因子は、不登校生徒に対して心配したり支援したりしたいという気持ちを示す項目で構成されている。関与をしなかったり、他者に言われたりして関与した者と比較すると、自発的に関与をした者は、ある程度、不登校生徒との交流を図ろうと試みていると推測できる。したがって、女性においては、『自発的な関与群』の方が『関与なし群』及び『他者による関与群』よりも有意に不登校生徒に対して『関心』があることが示されたのではないだろうか。一方で、交友関係を築くにあたって『関心』が高いからこそ不登校生徒に自発的に関与していたのではないかと、ということも考えられるため、慎重な解釈が求められるだろう。

また、『関心』において男性は、不登校という状況の中で共通なものを共有することが困難であったことから、女性とは異なり関与行動経験群の間で『関心』に差が見られなかったのだと考えられる。

さらに、男女ともにほとんどの下位尺度において、

関与行動経験群の間に差が見られなかった。これは、青年の友人関係の特徴や親密性が関係していると考えられる。岡田（1993）では、青年における友人との関わり方として、対人関係が深まることを避けたり、他者からの評価を気にしたりするという特徴をもつ者の存在を明らかにした。つまり、友人と表面的に関わっているといえる。このことから、不登校生徒に対して関与行動を起こした者であっても、その関わりが表面的なものであった可能性があったり、不登校生徒の内面に踏み込まないように不登校生徒自身の意思を尊重したりするという思いがあったのではないだろうか。また、笠井（2006）では、不登校児を対象としたキャンプに参加した学生スタッフの学びとして、キャンプの中で自由時間、食事、睡眠など日常生活も含めて密に関わることからネガティブな特性だけでなくポジティブな特性など、様々な側面についての気づきや理解が生じるのだろう、という学びが挙げられている。つまり、1日であっても深く関わることで性格や考え方などを知り、理解できるものがあるということである。本研究では、関与行動リストの中の一つの項目に対して一度でも行った場合は関与ありとして判断したことから、実際に不登校生徒とどの程度深く関わったのか、また親密度はどれほどなのかについては明らかとなっていない。そのため、『自発的な関与群』または『他者による関与群』に分類されたとしても、不登校生徒への理解につながるほどの関与行動ではなかった可能性が考えられる。したがって、男女共に、関与行動経験の群間において、ほとんどの下位尺度で有意な差が見られなかったのだと考えられる。

今後の課題

本研究では、不登校状態にある人及び不登校状態に陥ったことがある人へのイメージや評価が男女でどのように異なるのかどうかを検証することを目的とした。その結果、ほとんどの下位尺度で性差が見られなかったものの、男性の方が女性よりも『批判的イメージ』を抱いていることがわかった。また、女性においては、自発的に関与行動経験をしたことがある人の方が、自発的には行動をしたことがなかったり、そもそも関与をしたことがなか

たりする人よりも『関心』が高いことも分かった。このことから、一概に何らかの形で不登校生徒との関わりをもたせることがイメージ及び評価意識の変容につながるということではないといえる。したがって、適切な不登校支援へと繋げるうえで、性別など周囲の者の個性によって、不登校生徒へ抱くイメージや関心に違いがあることをもとに、学級における環境調整など配慮する必要があるだろう。

しかし本研究では、関与あり群であった者の関与行動を起こした程度や頻度、不登校生徒との親密さなどの関係性を明確にせず研究を行った。そのため、関与あり群であったとしても、相手の特性に気づきが得られにくい程度の関与行動であった者が存在した可能性や、不登校へ関心がある故に関与行動を示した可能性もある。また、自発的に関与した者がどのような過程や意思で、関与行動を起こしたのかに関しては明らかとなっていない。そのため今後は、不登校生徒との関与の程度や親密さを含めて、不登校のイメージ及び評価意識との関連を検証し、学級調整などの不登校支援へどのように生かされるか検討する必要があると考えられる。

付 記

本論文は、第一著者が2021年度に愛知淑徳大学心理学部に提出した卒業論文の一部を加筆・修正したものである。

謝 辞

本論文の作成にあたり、調査にご協力くださった高等学校の先生方、そして生徒の皆様、心より御礼申し上げます。

引用文献

- 榎本 淳子（1999）. 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 藤田 正・西川 潔（1999）. 他者からの受容感と学校が楽しい理由について 奈良教育大学教育研

- 究所紀要, 35, 95-102.
- 原田 唯司 (2005). 「現代青年の規範意識と非行行動」 青年心理学研究, 17, 89-92.
- 本間 友巳 (2000). 中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析 教育心理学研究, 48, 32-41.
- 伊藤 真紀・岡田 守弘 (2000). 不登校に対する中学生の認識(1) 日本教育心理学会総会発表論文集, 42, 639.
- 石本 雄真 (2011). 現代青年における友人関係の特徴と心理的適応および学校適応との関連 発達科学, 25, 13-24.
- 笠井 孝久 (2000). 不登校児との共同体験による不登校児イメージの変化 千葉大学教育学部研究紀要. I, 教育科学編, 48, 221-229.
- 笠井 孝久 (2001). 不登校児童生徒が期待する援助行動 千葉大学教育学部研究紀要 I 教育科学編, 49, 181-189.
- 笠井 孝久 (2006). 不登校児を対象としたキャンプに参加した学生スタッフの学び 千葉大学教育学部研究紀要, 54, 99-103.
- 小池 春妙 (2007). 不登校に対するイメージ——現代の若者は不登校をどう見ているか——日本心理学会発表論文集, 71, 3AM055.
- 小池 春妙・伊藤 義美 (2008). 不登校児への関与行動の有無による完全主義の違い 日本心理学会大会発表論文集, 72, 745.
- 松坂 文憲 (2010). 不登校経験者が語る“不登校経験の意味”——“自己資源化の可能性”の提案—— 岩手大学外学院人文社会科学研究科紀要, 19, 39-56.
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2019). 「不登校児童生徒への支援の在り方について(通知)」 令和元年10月25日 文部科学省ホームページ Retrieved from https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1422155.htm (2020年12月23日)
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2021). 令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について 文部科学省ホームページ Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20211007-mxt_jidou01-100002753_1.pdf (2021年11月11日)
- 中村 恵子・小玉 正博・田上 不二夫 (2011). 適応指導教室での充実感と登校行動との関連 カウンセリング研究, 44, 28-37.
- 小栗 貴弘 (2019). 高校中退リスク評価尺度(RAS-HD)の妥当性および高校中退リスクに対するソーシャルサポートの影響の検討 教職実践センター研究紀要, 7, 33-42.
- 岡田 努 (1993). 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, 519, 43-55.
- 尾見 康博 (1999). 子どもたちのソーシャル・サポート・ネットワークに関する横断的研究 教育心理学研究, 47, 40-48.
- 鈴木 翔 (2020). 登校意識の社会的性差 教育社会学研究第106集, 167-187.
- 有倉 巳幸・乾 丈太 (2006). 児童・生徒の友人関係の排他性に関する研究 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編, 58, 101-107.

High school students images of school refusal:
Engaged behavioral experiences with school-refusing students

Kanna Kondo and Yuko Kiyotaki

Abstract:

This study examined gender differences in images and evaluative attitudes regarding school refusal among first-year high school students. We administered a questionnaire survey to high school students ($N=159$). The results showed that “critical images” regarding school refusal were more common among men than women, especially in the “voluntary involvement” group. Moreover, in women, the “spontaneous involvement group” was more interested in school-refusing students than the “no-involvement group” or the “involvement by others group.” In contrast, men showed no significant differences in any of the subscales. These results demonstrated gender differences in the “critical image” of school-refusing students. Furthermore, women’s interest in school-refusing students differed based on their involvement with such students.

Key words: high school students, school refusal, imagery, engaged behavioral experiences